

72 葦原檢校の遺跡と木像について

——『鍼道発秘』を著し、没落した木曾家再興を果たした生涯

大 浦 宏 勝

北里研究所東洋医学総合研究所

【前言】

葦原檢校は、『鍼道発秘』の著者として知られるが、その詳しい業績および履歴については、あまり知られていない。既に横田観風は、群馬県北橋村の木曾三柱神社内に葦原檢校木像が安置されており、葦原檢校の子孫が住んでいることを報告。その後町泉寿郎は、北橋村の木曾家に伝わる『木曾氏家禄』他の古文書類の存在を明らかにし、葦原檢校の経歴をまとめた。今回、この『木曾氏家禄』に基づき、全国各地に存在する葦原檢校の足跡を調査して回った結果、『家禄』の信憑性が確定し、遺跡および新たな木像の発見があったゆえ報告する。

【葦原檢校の略歴】

葦原檢校英俊一は、幼名を造酒太郎といい、寛政九年（一七九七）四月十一日、江戸桜田において誕生した。父は木曾忠太夫義富、木曾義仲の二十七代目末裔に当たる。七歳の時、麻疹を病み失明、当道座・岸村檢校の門に入り、剃髪して「英俊」と名を改めた。その後、坂幽玄法眼（奥医師）を師として鍼術を修業、「鍼術免許」を受ける。

幼年より真田家へ出入りし鍼治を為し、以後たびたび真田公に随従して松代へ行き、広く里人らに鍼治を施す。当道座内においては順次官位昇進し、文政四年（一八二二）十月、二十五歳にて檢校となる。江戸にては、一橋家、尾張家、紀伊家などの御館に鍼治を以て出入りしその名声および技量を認められる。

天保二年（一八三一）は葦原檢校にとつて、運命の転換点となる。七月には『鍼道発秘』を編み、門人および鍼術の志厚き者にこれを授けた。そして十二月には、十一代將軍家齊公および家慶公に初めて御目見えする。その後、天保三年九月に奥医師並を仰せ付けら

れ、多くの諸大名・家臣の治療にも当たり、名実ともに確固たる地位を築いてゆく。天保四年六月には帯刀免許を得、天保七年十一月には奥医師となり、天保十年九月に家齊公が類中風の症にて倒れた際、鍼治し頗る効験あつたことから、十二月には法眼位に叙せらる。天保十二年九月には、ついに当道座を離れ、表法眼席に加わり「葦原源道」と名乗る。

この間、祖先の業績の顕彰および供養にも尽力した。天保五年九月には、近江国粟津（現在の天津市）の義仲寺境内に木曾義仲の遺跡碑石を建立。天保八年八月には、武蔵国多摩郡世田谷領大蔵村に元祖・源義賢の古墳を整備し石標を造立。天保十五年三月には、下総網戸村（現在の旭市）東漸寺にて戦国時代を生き抜いた波乱の武将・木曾義昌の二百五十回忌追善供養として、諸侯諸家より和歌を集め『慕香和歌集』を奉納。また、長年の悲願であつた木曾家再興を果たした。

この後、安政四年（一八五七）十一月五日、六十一歳にて病死する。諡号は「一心院殿前侍医兼中務卿法眼万法日新居士」、新宿にある鳴子常円寺に葬られた。

【調査結果と検校木像】

葦原検校の遺跡は全国におよぶ。滋賀県大津の義仲寺（義仲顕彰碑）、群馬県北橋村の木曾三柱神社（木像・掛軸・古文書）、長野県松代町の虫歌観音堂（木像）、千葉県東漸寺（義昌墓・慕香和歌集）、世田谷区大蔵（義賢墓碑）。今回発見した松代町・虫歌観音堂内の葦原検校木像は、検校二十六歳の時の物であり、検校装束に身を包んだ姿はめずらしい。五千人に及ぶ里人を治療したことから、報恩のため里人等により寄進された物と伝えられている。作は木曾三柱神社の検校木像と同じ、善光寺仏師・村上刑部である。

以上全ての遺跡を総合調査し、『家禄』の信憑性および葦原検校の経歴を確定した。詳細な結果は、後日「医史学雑誌」に発表する。